



Title	母親の子どもの感情認知が育児自己効力感へ及ぼす影響： 母親の"ego-resilience"との関連から
Author(s)	金城, 志麻
Citation	琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 = BULLETIN OF PRACTICE CENTER FOR EDUCATION OF CHILD DEVELOPMENTAL SUPPORT(6): 1-10
Issue Date	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30974
Rights	

母親の子どもの感情認知が育児自己効力感へ及ぼす影響

～母親の“ego-resilience”との関連から～

金城 志麻¹⁾

Effects of maternal mind-mindedness and ego-resilience on Parenting

Shima KINJO¹⁾

問題と目的

厚生労働省の調査によると、平成24年度の児童相談所の児童虐待の相談対応件数は初めて6万件を超える過去最多件数を更新しており、集計を開始した平成2年度から20年連続で増加していることが明らかとなった。児童虐待防止法が施行された平成11年度に比べると5.7倍に増加する等、増加の一途をたどっている現状がある。平成24年度では、実母による児童虐待が約57%であり、虐待を受けた年齢に着目すると、幼児期が43.5%と高い割合を占めていた。このことから、核家族化や地域のつながりが希薄になってきたことによって家庭での子育てが孤立しやすく、母親ひとりで悩みを抱え、育児困難に陥ることが考えられる。虐待問題の解決は社会的に極めて重要な課題であり、特に乳幼児期の子育てに対する臨床心理学的介入は重要と言えよう。

このような育児の現状を受けて、今日に至るまでには多くの育児研究がなされてきた。虐待を未然に防ぐ要因を見出すために、母親の育児感情、特に育児不安や育児ストレスなど、育児に対する否定的な感情が多く取り上げられている。育児に対する否定的感情は、“育児不安”あるいは“育児ストレス”と呼ばれることが多い。だが、その名称や定義は統一されておらず、また同時に、その捉え方や内容も多岐にわたる。このように育児への否定的感情が目される一方で、「子どもはかわいい」、「育児は大事な仕事だ」といった育児への肯定的感情は、世代によっ

て変化がないとの指摘もある（柏木、2003；厚生労働省、2003）。以上のことから育児感情は、否定的・肯定的感情が混在した状態にあると言えるだろう。首藤・馬場（1995）は、「充実感」「疲労感」「否定感」の3つの下位尺度から構成された「育児感情測定尺度」を作成し、育児への否定的・肯定的感情それぞれが独立した概念としている。また、育児不安との関係について住田（1999）は、育児は母親の肯定的感情が基底をなしているため、ある程度の育児不安を抱えても育児への肯定的感情が確固としているために、育児不安が喚起されることはなく、それによる混乱も生じないが、育児不安が喚起され、育児への肯定的感情を上回るようになると、両者のバランスが崩れ、結果的に不安状況に陥ることになると説明している。しかし、こうした感情を全く経験しない親などはおらず、それ自体は問題ではなく（荒牧・無藤、2008）、むしろ母子相互作用のなかで様々な感情をバランスよく経験することが重要であると考えられる。

ところで、母子相互作用研究においては言語的コミュニケーションを開始する前の子どもに対する母親による子どもの内的状態の読み取り、つまり、母親が子どもの情緒表現に気付くことや、ものごとを子どもの心の観点から捉える傾向が重視されてきた（Emdeら、1983；Meins、1997；Oppenheimら、2002）。そして、母親が読み取った乳児の試行や欲求、感情の状態は、子どもへの関わりと関連していることが報告されている（Sorceら、1982）。こうした、

¹⁾ 琉球大学教育学部 心理臨床科学コース

母親による乳児の心的状態の読み取りの質や量は、母親が育てる子どもに対する関わり方を通じて、子どもの愛着型 (Fonagyら、1995 ; Meinsら、2001 ; Koren-Karieら、2002) や認知発達 (Meinsら、2006) に影響を与えることが示されてきた。Meins (1997) によって提唱された、子どもを「心」をもった存在であるとみなし、子どもの「心」に焦点化して関わろうとする傾向である“Mind-Mindedness (以下 MM)” が高い母親は子どもの注意を尊重して追従する関わりを多く行っており (篠原、2006)、これは子どもに焦点化した関わりとして母親が子どもに合わせた行動をしているためと考えられる。つまり、母親が子どもの心に焦点化した関わりをすることが、子どものより望ましい発達を導くとして重要視されているのである。このように、母親による子どもの内的状態の読み取りは、子ども側の愛着形成や発達を促す要因として注目され、子どもにとっての重要性が強調されてきた。しかし、MM のあり方と母親の育児感情との関連性について焦点を当てた研究は少ない。

母親の MM のあり方が育児感情等にどのような影響があるのかといった母親に焦点を当てた金城 (2012) は、IFEEL Pictures を用いて母親が子どもの感情面に対する情緒応答性という視点から育児自己効力感の関連を検討した。その結果、子どもの「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親より子どもを自己統制させる自信が低いことを示した。つまり、母親が子どもの感情を強く読み取ることで、子どもの気持ちに寄り添う状況をつくりやすく、それが母親の関わり方の難しさを生む可能性も否定できないと指摘した。このことから、母親の子どもの気持ちの読み取りの強度によって、状況に合わせた対応が出来ず、育児自己効力感の低下に繋がる可能性が考えられる。

育児自己効力感とは「親としてどのくらい有能かつ効果的にふるまうことができるかという程度に関する親の期待」のことで (Teti & Gelfand、1991)、育児役割においてうまくやっていくことができるという、親としての能力に対する自信である (Coleman & Karraker、1997)。育児自己効力感についての研究は全般的に少ないが、育児自己効力感が、育児に対する個人的な満足感や適応、そして親が子どもに与えることのできる心理的または物理的環境の質を理解するための変数として重大であることが明らかにされている。つまり、育児自己効力感は、育児に関する達成能力を左右し、その結果、子どもの行動と

発達に影響を与えるものであると解釈できる。田坂 (2003) は、幼児期の子どもを持つ母親の育児自己効力感を測定する尺度を作成し、「子どもへの積極的関わりへの自信」「子どもを安堵させる自信」「子どもを自己統制させる自信」の3因子を見出した。このような母親の育児に対する自信、子育ての原動力となる要因を探る視点も必要であると考えられる。

一方、実際の母子相互作用においては、母親は子どもの内的状態を読み取るばかりではなく、自身の主観性に基づいた働きかけをしているという報告もある (鯨岡、1986)。上嶋・小原 (2008、2010) は、母親は子どもに対する影響の与え手としてだけでなく、自らも主体性を持った存在として相互作用を構成しているという考えのもとに、母親が子どもへの関わり方を決定する際にどのような情報にアクセスしているのかを調べた。その結果、母親が使用している情報は乳児の情動や乳児の行動といった乳児に起因するものだけではなく、親の主観性や育児経験などの母親に起因するもの、周囲の環境などの外部要因の3つに大別されることが示された。そこで、小野寺 (2008) は、母親のパーソナリティ特性のひとつとしての母親の Ego-Resilience (以下 ER) が母親の養育態度に与える影響について検討しており、ER の高い母親は自信をもって子育てをおこなっており、柔軟な養育態度でうつ傾向が低いことを明らかにしている。

Block (1980) はやる気、情緒そして行動が個人の中でバランスよく機能していくための重要な要因として ego-control (以後 EC) と ego-resilience (以下 ER) という概念を提起している (Block & Block、1980)。まず EC であるが、これは衝動の抑圧／表出に関連している概念である。Block によれば、EC には2つの極が想定されており、その一方が overcontrol、他方が undercontrol である。Overcontrol とは一言でいえば自分の欲求を極度に抑制することであり、その抑制の程度が強すぎる人は自らの力で決定を下すことが出来なくなってしまい、不必要なまでに我慢し自分が楽しむことに罪悪感すら感じて周囲から孤立してしまう傾向にある。一方の undercontrol とは、overcontrol とは正反対の極にあり、自分の欲求の趣くままに行動をとることである。Undercontrol の傾向が強い人は、社会が適切な行動を求める場面においても我慢はせずに、常に自分の欲求を押し通そうとするため人からわがままで身勝手であるといった評価を受ける場合があ

る。そして ER は、この二極から成立している EC をその状況に適応できるように調節していく能力であるとし、ストレスを体験する状況で自分の制御を柔軟に調整する、パーソナリティのこれらの特性が、情緒、思考、行動における個人差を生み出すメカニズムであるとしている。そこで、小野寺 (2007) は日常的な営みの中で母親の ER 能力が問われることが多い育児において、自己制御 (EC) を適正な状態に調整する機能を担う ER を高めていくことが、育児ストレスの高い母親の育児を支援するにあたって大切な要因であることを示唆している。以上のことから、育児では子どもから情報を読み取るだけではなく、自らの主観も関与させながら母子相互作用を行っていることが考えられる。そのため、乳幼児期の子育て支援を考えていく上で、母親が子どもの心に焦点化して関わる際の認知的側面と母親自身のパーソナリティ特性の両側面に焦点を当てた検討が必要と考えられる。

本研究の目的

本研究では母親の子どもの心に焦点化して関わろうとする“Mind-Mindedness”傾向および母親の自己制御 (EC) を適正な状態に調整する機能を担う“Ego-Resilience”能力と育児自己効力感との関連を検討することを目的とする。

MM の提唱者である Meins の研究において、Meins, Fernyhough, Fradley, & Tuckey (2001) は、母子相互作用を観察し、MM と関連するような複数の母親行動に着目することで MM 個人差を抽出している。しかし、篠原 (2006) はこうした母子相互作用に基づく測定において、各々の母親の子どもにおける表情表出や行動の顕著さを均質であると想定することは現実的に困難であり、それに対する心的帰属といった母親の行動は、むしろ子ども側の特徴を反映している可能性を指摘し、複数の母親に共通の乳児刺激を呈示することで子ども側からの影響を統制し、それに対する心的帰属の際を指標に用いることで個人的特性としての MM を測定する、新たな MM の測定方法を案出し、MM の量だけでなく質的側面にも注目していくことの必要性を示唆している。

そこで、本研究では母親の MM の質的特徴をこれまでの先行研究などにに基づき、篠原 (2006) の案出した MM の測定方法に従って測定した MM の回数を“子どもの気持ちに対する言及のしやすさ”、子

どもの気持ちを快感情、不快感情どちらに捉えるのかを“子どもの気持ちの捉え方の方向性”、どのくらい強く感情を感じるのかを“子どもの気持ちの感じ方の強さ”として、3 側面から検討する。さらに、母親の MM と ER との関連を検討し、育児の原動力に繋がる要因を明らかにすることを目的とする。

予備調査

目的

母親の MM 測定で使用する映像刺激の選定にあたり、篠原 (2006) によって開発された方法に基づき、乳児の快感情、不快感情、それらのどちらにも偏らない中間の状態を含めて様々な状態が幅広く含まれているビデオクリップを作成することを目的とした。

方法

調査協力者：心理学を専攻する女子大学生 5 名であった。

材料

MM 測定のための刺激選定として、篠原 (2006) によって開発された方法に基づき、乳児 (男女各 1 名、生後 10 ヶ月) とその母親の 2 組の各家庭を訪問し、ビデオ撮影を行った。乳児の様々な場面を刺激に反映させるため、“母子自由遊び場面”、“乳児一人の遊び場面”、“母親との食事場面”を撮影した。刺激として用いる乳児の行動選定にあたり、第一点目に養育者が普段よく目にするような日常的な光景に近いものとなるよう考慮した。第二点目に、映像内の乳児に内的状態の存在を想定させるため、ある程度解釈可能な乳児の行動を採用することとした。以上の手続きを経て、乳児の行動の前後を含む約 30 秒間ずつ切り出し、ビデオクリップを作成した。さらに、ターゲットとなる行動を正確に特定するべく、ビデオクリップの途中で画面を一時停止することとした。

調査内容

本刺激の選定にあたり、各ビデオクリップの特徴を得るため、作成した 18 個のビデオクリップを用いて、篠原 (2006) の方法を参考とし、一時停止場面について“乳児の行動の背後に、どの程度明確に内的状態が存在すると思うか”を 8 段階評定で回答を求めた。また、“乳児にはどのような気持ちがある

のだろうか”を自由に記述してもらい、それを快感情、不快感情、どちらともいえないニュートラルな感情なのかを分類してもらい、さらに、“その気持ちはどのくらいの強さなのか”について8段階評定で回答を求めた。

結果

乳児の行動の背後にどの程度明確に内的状態が存在するかを問うた際の評定平均値のレンジは3.4-7.8、標準偏差には0.44-2.23までの幅が示された。感じる気持ちの強さについての評定平均値のレンジは0-6.2、標準偏差には0-2.94の幅が示された。これらより各クリップについて内的状態の易帰属性、評定者間における評価の分散といった相対的な特徴を得た。さらに本刺激の選定として、快感情、不快感情、どちらともいえないニュートラルな感情それぞれ場面に偏りが無いよう、また、状況が極端にわかりにくい場面にならないよう一致率が60~100%の場面を選定し、最終的に6つの場面のビデオクリップを本調査にて使用することとした。(Table 1)。

方法

調査対象者

乳幼児（0～3歳児）の母親30名（平均32.03歳、SD=5.31）であった。

材料

- ・MM：予備調査において相対的な特徴が確認された乳児の日常場面のビデオクリップ6場面を使用した。また、快・不快の回答及び強度については①非常に不快～⑤非常に快、の5段階評定を示した用紙を呈示し、回答を求めた。
- ・育児効力感：田坂（2003）の育児効力感質問紙の14項目について7段階尺度で回答を求めた（Table 2）。
- ・ER：畑・小野寺（2007）によって日本語化されたBlockによるThe Resilience Scale（ER89）の14項目について4段階尺度で回答を求めた（Table 3）。

Table 1 MM 測定のために選定されたビデオクリップ

NO	映像内容と一時停止場面の乳児行動	Mean (SD)	分類 (一致率)
1	ボールを両手に持ち、母親が違うボールを差し出し交換しようとするが、自分の持つボールも離せずにして、最終的に自分のボールを手放し、母親のボールと交換する。	5.6 (0.55)	N (60%) 快 (40%)
2	ボールを持って母親の側で遊んでいたが、ボールを両手に持ったまま匍匐前進をして母親のところに近づいていき、ベッタリ母親の太ももにくっつく。	4.6 (1.95)	快 (60%)
3	お風呂上がりで母親に頭を拭いてもらうが、動き出し母親の方を向いて泣いた表情を見せ、抱っこされると持っていたボールを落とし、また表情が歪む。	6.6 (1.52)	不快 (100%)
4	両手にボールを持ったまま仰向けに寝かせられてミルクを与えてもらうが、一度口から離されて一瞬泣く。その後、すぐに戻されミルクを飲みながら母親の方を見る。	5.0 (2.24)	快 (80%)
5	テーブルの上に登り、笑顔を見せて母親の方を見るが、降りようとする時には母親の方に背を向けて、母親が差しのべた手を無視し、ひとりで下りようとする。	3.8 (1.30)	N (60%) 不快 (40%)
6	母親と一緒に遊んでいるが、体勢のバランスを崩し、うまく前に進めずに泣くが、母親が手を差しのべ抱っこしてもらえると笑顔が戻る。	5.0 (1.87)	不快 (60%)

Table 2 育児自己効力感質問項目

第一因子 子どもへの積極的関わりの自信
1. 子どもとしっかり遊んだりあるいは話をする中で子どもの気持ちを満足させている
3. 子どもはあなたをよく遊んでくれる遊び相手、あるいはよき理解者だと思っている
6. 子どもに合った色々な遊び方で関わっている
9. 子どもがまねできるような良いお手本を見せている
11. 忙しい時でも子どもの話を聞いている
14. 子どもの行動や表情に敏感に反応している
第二因子 子どもを安堵させる自信
2. 子どもが自信がつくように良いところは褒めている
5. 子どもがぐずった時あるいは元気がない時になだめている
7. 子どもが不安そうにしている時言葉をかけて安心させている
10. 子どもの機嫌が悪い時は落ち着いて話をすることが難しい (R)
13. 子どもが泣き出した時、私に関わることで泣き止む
第三因子 子どもに自己統制させる自信
4. 子どもに我慢させるべき事は我慢させられる
8. 子どもがどうしても言う事を聞かない時には子どもの要求通りにしてしまう (R)
12. 子どもが聞き分けのない時には何を言っても無駄だと思う (R)
Rは逆転項目を表す

Table 3 “Ego-Resilience” 質問項目

1. 私は友人に対して寛大であると思う
2. 私はショックなことがあっても早く立ち直るほうだ
3. 私は初めてのことや不慣れなことにでも楽しみながら取り組める
4. 私は普段、人に好印象を与えていると思う
5. 私は今まで食べたことがない食べ物をすすんで試してみる方だ
6. 私は人からとてもエネルギッシュな人だと思われる
7. 私はいつもの場所へ行くにも、違う道を通ってみたりするのが好きだ
8. 私は人よりも好奇心が強いと思う
9. 私の出会う人は、魅力的な人が多い
10. 私は普段、慎重に考えてから行動するほうだ
11. 私はいろいろ新しいことをするのが好きだ
12. 私は日々の生活の中で面白いと感じることによく出会う
13. 私は自分が「たくましい」性格だと思っている
14. 私は誰かのことで腹を立てても、比較的すぐに機嫌が直るほうだ

手続き：

(1) MM の測定

ビデオクリップを PC モニターに呈示し、15分程度の個別調査にて測定を行った。母子分離が出来ない場合は子どもも同席した。まず、例示用のビデオクリップを呈示しながら“これから赤ちゃんの気持ちについてお尋ねします”と教示し、調査の手順等の説明を行った後、ビデオクリップについて“乳児がどんなことを思ったり、考えたり、感じたりしていると思いますか？”と質問を行った。回答方法は心的帰属の内容面における個人差をとらえることも考慮して、母親が想起した具体的な内容を自由に話すように求めた。次に、“その乳児の気持ちは快、不快、あるいはどちらともいえないニュートラルな感情のどちらだと思いますか？”と質問し、気持ちの強度についても“その気持ちをどのくらい強く感じますか？”と5段階評定で回答してもらった。1 試行ごとにビデオクリップは2回呈示され、2 回目の再生途中の一時停止場面にて回答を得た。母親の回答はすべて録音された。

(2) 育児効力感、ER の測定

ビデオクリップによる MM の測定後、育児効力感と ER それぞれを質問紙にて回答を求めた。

結果の処理

・MM 測定の回答

ビデオクリップによって測定された回答について分類を行った。分類については Brown & Dunn (1991)、松永・斉藤・荻野 (1996) を参考にし、喜怒哀楽などの“感情状態”、物や行為の要求、動機付けや意志を示す“欲求状態”、思考や認知を示す“思考・認知状態”、痛みや眠気などを示す“生理的知覚状態”の4つを設けた (Table 4)。一つの刺激に対し複数の回答が得られた場合、内容が異なるもの (例“迷っている。楽しそう。”) は感情状態のうち「思考・認知」と「喜び」として各々カウントし、重複する内容 (例“疲れた。眠い。”) は「生理的知覚状態」として併せて1回と数えた。乳児の行動描写 (例“身体を使って遊びを習得している”)、具体的な内的状態が不明 (例“おかあさーん”) といった回答は除外された。下位分類によってカウントされた合計数を MM 回数得点とした。

・MM の方向性

MM の方向性として、感情 (快・不快・ニュー

トラル)を測定した質問紙の回答から、快感情を3点、どちらでもないニュートラルな感情を2点、不快感情を1点として得点化し、得点が高くなるほど子どもの気持ちを“快感情”と捉えやすいとした。

・MMの強度

MMの強度として、5段階で感情の強度を測定した質問紙の回答から、非常に快、非常に不快を3点、やや快、やや不快を2点、どちらでもないを1点として得点化し、得点が高くなるほど子どもの気持ちを強く捉えやすいとした。

Table 4 乳児の内的状態に関する分類表

感情状態

- 好み：好き、大好き、いい など
- 喜び：嬉しい、楽しい、おもしろい など
- 驚き/興奮：驚く、びっくりする、興奮する など
- 嫌悪：いや、きらい、もういい など
- 悲しみ：悲しい、さびしい など
- 機嫌：機嫌がいい(悪い)、ご機嫌ななめ など
- 恐れ：こわい(こわくない)、恐怖 など
- 困惑：どうしよう、困った など
- 甘え：甘えている など
- 思いやり：どうしたの?、大丈夫? など
- 飽き：飽きた、もういい、 など

欲求状態

- して、—しないで、—したい、—したくない、
- 欲しい、ちょうだい、いらない など

思考・認知状態

- と思う、考える、—かな、わかる、わからない、
- 知っている、知らない、忘れる、思い出す、
- 覚えている、期待する、何だろう など

生理的知覚状態

- おいしい(おいしくない)、眠い、疲れた、痛い、
- おなかがすいた(おなかいっぱい)、暗い など

群分け

MM回数、強度の高群・低群、MM方向性の快群・不快群、ER高群・低群の群分けはそれぞれ平均値以上を高群(快群)、平均値以下を低群(不快群)とした。

結果

1. 母親のMMとERとの関連について

母親のMM回数高群・低群、MM方向性快群・不快群、MM強度高群・低群において、ER得点に

差があるのかを検討した。

その結果、Table 5より、MM回数高群・低群(F=1.376 n.s.)、MM方向性快群・不快群(F(1)=1.251 n.s.)、MM強度高群・低群(F(1)=.040 n.s.)の間にそれぞれER得点に有意な差はみられなかった。このことから、母親の子どもの気持ちに対する言及のしやすさ、気持ちの捉え方の方向性、気持ちの強さによってER能力に違いはみられないことが示唆された。

2. MM回数とERと育児自己効力感との関連について

MM回数高群・低群において、ER高群・低群それぞれの間に、育児自己効力感全体の合計得点と育児自己効力感の因子別得点に差があるのかを検討するために、2要因の分散分析を行った。その結果、ER高群・低群の間に、育児自己効力感全体の得点でERの主効果がみられた(F(1)=5.135, p<.05 Table 6)。育児自己効力感の因子別得点では「子どもを安堵させる自信」に有意傾向がみられた(F(1)=2.977, p<.10)。その他「子どもと積極的に関わる自信」(F(1)=1.974, n.s.)、「子どもに自己統制させる自信」(F(1)=.770, n.s.)の得点には有意な差はみられなかった。

以上のことから、MMの回数の高低に関係なく、ERが高いと育児効力感が有意に高く、特に「子どもを安堵させる自信」が高くなる傾向が示唆された。

3. MM方向性とERと育児自己効力感との関連について

MM方向性快群・不快群において、ER高群・低群それぞれの間に、育児自己効力感全体の合計得点と育児自己効力感の因子別得点に差があるのかを検討するために、2要因の分散分析を行った。その結果 育児自己効力感全体の得点においてERの主効果がみられた(F(1)=5.658, p<.05 Table 7)。

また、「子どもと積極的に関わる自信」因子得点では、交互作用の傾向がみられ(F(1)=3.879, p<.10)、単純主効果検定の結果、MM方向性快群においてER高群・低群との間に「子どもと積極的に関わる自信」の得点に有意な差がみられた(t(10)=2.260, p<.05)。また、ER高群においてMM方向性快群・不快群との間に「子どもと積極的に関わる自信」の得点に有意な差がみられた(t(14)=2.238, p<.05)。「子どもを安堵させる自信」因子得点にはERの主効果に有意傾向がみられ(F(1)=3.029, p<.10)、

Table 5 MM それぞれの群と ER 得点に関する分析結果

MM		N	M	SD	F値	p 値
MM 回数	高群	15	36.93	7.066	1.376	0.251
	低群	15	40.07	7.554		
MM 方向性	高群	12	36.67	9.129	1.251	0.273
	低群	18	39.72	5.879		
MM 強度	高群	12	38.83	9.003	0.04	0.844
	低群	18	38.28	6.313		

Table 6 育児自己効力感との分析結果

育児効力感	MM 回数高群		MM 回数低群		MM 主効果	ER 主効果	交互作用
	ER高群	ER低群	ER高群	ER低群	F値	F値	F値
全 体	75.67 (3.882)	69.38 (5.449)	71.70 (6.783)	68.00 (6.450)	1.468 n.s.	5.135*	.345 n.s.
積極的	32.00 (1.265)	29.63 (2.825)	29.70 (4.218)	28.50 (3.937)	1.812 n.s.	1.974 n.s.	.213 n.s.
安 堵	29.33 (3.724)	27.38 (2.560)	28.70 (3.802)	26.33 (3.011)	.450 n.s.	2.997 †	.027 n.s.
自己統制	14.33 (2.422)	13.00 (2.708)	12.38 (3.292)	13.17 (2.137)	.525 n.s.	.770 n.s.	1.084 n.s.

† p<.10 *p<.05

「子どもに自己統制させる自信」(F(1)=.812、n.s.)の得点には有意な差はみられなかった。

以上のことから、母親の ER が高く、かつ子どもの快感情を多く捉えている場合、不快感情を多く捉えている母親に比べ「子どもと積極的に関わる自信」が高いといえる。つまり、ER が高くても子どもの気持ちを不快と捉える母親の方は「子どもと積極的に関わる自信」が低くなることが示唆された。

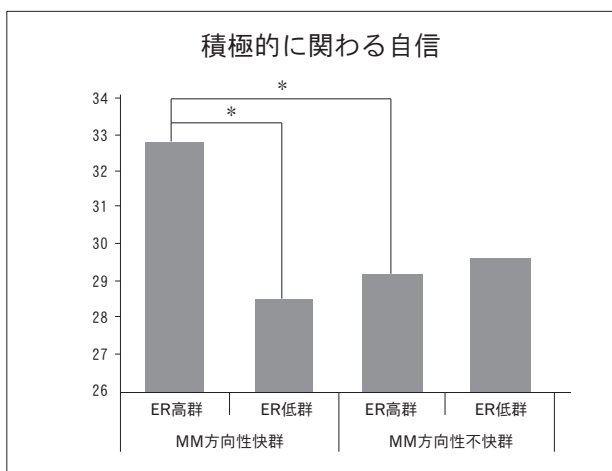


Figure 1 「子どもと積極的に関わる自信」について

4. MM 強度と ER と育児自己効力感との関連について

MM 強度高群・低群において、ER 高群・低群それぞれの間に、育児自己効力感全体の合計得点と育児自己効力感の因子別得点に差があるのかを検討するために、2 要因の分散分析を行った。ER 高群・低群の間に、育児自己効力感全体の得点に有意な差はみられなかった (F(1)=1.57、n.s.)。育児自己効力感の因子別得点では「子どもと積極的に関わる自信」(F(1)=.440、n.s.)、「子どもを安堵させる自信」(F(1)=1.102、n.s.)、「子どもに自己統制させる自信」(F(1)=.178、n.s.) の得点にはそれぞれ有意な差はみられなかった。

以上のことから、子どもの気持ちの読み取りの強さにおいて、ER の高さで育児自己効力感との関連はみられないことが示唆された。

考 察

本研究の目的は、母親の子どもの心に焦点化して関わろうとする“Mind-Mindedness”傾向（以下 MM）と母親の自己制御を適正な状態に調整する機能を担う“Ego-Resilience”能力（以下 ER）と育児

Table 7 育児自己効力感との分析結果

育児自己効力感	MM 方向性快群		MM 方向性不快群		MM 主効果	ER 主効果	交互作用
	ER高群	ER低群	ER高群	ER低群	F値	F値	F値
全 体	76.50 (5.541)	68.33 (5.354)	71.20 (5.673)	69.13 (6.289)	1.096n.s.	5.658*	2.002n.s.
積極的	32.83 (3.125)	28.50 (3.507)	29.20 (3.155)	29.63 (3.204)	1.078n.s.	2.617n.s.	3.879 †
安 堵	29.50 (3.674)	26.50 (3.391)	28.60 (3.806)	27.25 (2.252)	.004n.s.	3.029 †	.436n.s.
自己統制	14.50 (1.871)	13.33 (3.266)	12.90 (2.885)	12.25 (2.493)	1.096n.s.	.812n.s.	.066n.s.

† p<.10 *p<.05

Table 8 育児自己効力感との分析結果

育児自己効力感	MM 強度高群		MM 強度低群		MM 主効果	ER 主効果	交互作用
	ER高群	ER低群	ER高群	ER低群	F値	F値	F値
全 体	68.25 (2.986)	68.33 (5.354)	74.83 (5.967)	69.13 (6.289)	2.698n.s.	1.57n.s.	1.664n.s.
積極的	28.75 (3.594)	28.50 (3.507)	31.17 (3.460)	29.63 (3.204)	1.718n.s.	.440n.s.	.228n.s.
安 堵	26.75 (2.872)	26.50 (3.391)	29.67 (3.701)	27.25 (2.252)	2.084n.s.	1.102n.s.	.728n.s.
自己統制	12.75 (2.217)	13.33 (3.266)	13.75 (2.768)	12.25 (2.493)	.001n.s.	.178n.s.	.922n.s.

† p<.10 *p<.05

感情としての育児自己効力感との関連を検討することであった。

1. 母親の MM と ER との関連について

母親の MM と ER との関連について、MM 回数（高群・低群）、MM 方向性（快群・不快群）、MM 強度（高群・低群）それぞれにおいて ER 得点に有意な差はみられず、母親の MM の特徴によって ER 能力の違いはみられないことが示された。具体的には、子どもの気持ちに対する言及のしやすさ、気持ちの捉え方の方向性、気持ちの強さと母親の ER 能力は関連していないといえる。よって、母親の認知や思考の特性としての MM とパーソナリティ特性としての ER は互いに独立しており、別の次元にある特性として存在していると考えられる。

2. MM 回数と ER と育児自己効力感との関連について

母親の子どもの気持ちへの言及の程度に関係なく、ER が高い母親は低い母親に比べ、育児自己効力感が有意に高いことが示唆された。具体的には、子ど

もの気持ちに対して言及のしやすさに関係なく、母親の ER が低いよりも高い母親の方が、育児に対する効力感が高いことが示唆された。育児自己効力感因子では、ER が高い方が低い母親に比べて「子どもを安堵させる自信」が高い傾向が示唆された。「子どもを安堵させる自信」の質問項目としては「子どもが自信がつくように良いところは褒めている」「子どもが不安そうにしている時言葉をかけて安心させている」等であった。小野寺（2008）は、ER と母親の養育態度について ER が高い母親は自分の子育てに後悔することが少なく、自信をもっており、子どものよい点に目を向け、工夫をしながら柔軟に子どもと関わっている傾向があることを示したが、本研究の結果も同様の結果を示したと思われる。母親が行う育児では、ごく日常的な営みのなかで母親自身の自己制御が問われることが多いため母親の ER 能力が養育態度などに関連しているとの指摘のように（小野寺、2008）、母親の ER 能力の高さは、子育てを肯定的に捉え、子どもとの相互作用の中でバランスよく対応することができるという育児に対する効力感へと繋がっている可能性が考えられる。

3. MM 方向性と ER と育児自己効力感との関連について

母親が子どもの気持ちを快感情あるいは不快感情と捉えやすさに関係なく、ER が高い母親は育児自己効力感全体が有意に高いことが明らかになった。育児自己効力感因子では、ER が高い方が低い母親に比べて「子どもを安堵させる自信」が高い傾向が示唆された。

一方、「子どもと積極的に関わる自信」育児自己効力感因子では、MM 方向性と ER に交互作用の傾向が見られた。子どもの気持ちを快感情と捉えやすい母親において ER が低いと「子どもと積極的に関わる自信」が低くなることが明らかになった。母親が子どもの気持ちを快感情として捉えることは、柏木 (2003) の定義した、「子どもはかわいい」「育児は大事な仕事である」といった育児に対する肯定的な感情に繋がり、子どもと積極的に関わりやすくなると考えられる。しかし、小原 (2005) は 育児を困難と感じている母親ほど、試行錯誤的な関わりを必要とされる子どもの不快感情の読み取りを回避している可能性を指摘しており、ストレス状況下で自分の制御を柔軟に調整する ER の低い母親がより試行錯誤的な関わりを必要とされる子どもの不快感情を回避した結果、快感情の読み取りが高くなった可能性も考えられる。

また、ER が高くても子どもの気持ちを不快感情を捉えると「子どもと積極的に関わる自信」が有意に低くなることが明らかになった。母親が子どものぐずりや泣きなどといった不快感情として捉えることは、そのとき子どもに何を求められているのかがわかりにくい、子どもの気持ちを断定しにくいものであり、前原 (2005) によると、母親は子どもとの相互作用を通して自分自身の応答性や関わりの有効性を確認していると指摘しており、ER が高いと、積極的に人と関わろうとする意識は高いことが考えられるが、子どもの気持ちを不快感情と捉えやすいという MM の特徴をもっていると、育児場面において、これまでの対人関係とは異なった子どもを対象とした非言語のコミュニケーション、あるいは、簡単には回避できない 1 対 1 の関係において、子どもと関わろうとしてもうまく関われないという、育児の困難さに直面すると推測される。

4. MM 強度と ER と育児自己効力感との関連について

母親の MM 強度と ER と育児自己効力感との関

連について、MM 強度高群・低群それぞれにおいて ER の高さによる育児自己効力感の得点に有意な差はみられなかった。今回 MM の回数、方向性においては ER の主効果がみられたが、子どもの気持ちの読み取りの強さには ER の高さに関連して育児自己効力感に影響を及ぼすことはないと考えられる。これは、金城 (2012) の子どもの「あいまいな表情」に感情を強く読み取る母親の方が、そうでない母親より子どもを自己統制させる自信が低いことを示した結果と相反する結果であった。「あいまいな表情」では、どのような感情を読み取ったとしても子どもの感情により即した“読み取りにはなり得ないと考えられる。つまり、正解がない中で母親が子どもの感情を強く読み取ることは、子どもの状況に合わせた対応がより求められることから、ER も関連していると推察される。本研究では、快感情、不快感情、どちらともいえないニュートラルな感情場面に対する MM の強度を測っており、「あいまいな表情」に限定したものではなかった。そのため、子どもの気持ちの読み取りの強さと ER が育児自己効力感に影響を及ぼさなかったと推測される。このことから、より MM が働かせにくい子どもの状態における、母親の子どもの気持ちの読み取りの強度と ER が、育児自己効力感への影響を検討することが必要と考えられる。

5. 子育て支援にむけて得られた知見

これまで発達心理学の母子相互作用研究においては、母親の“mind-mindedness”傾向によって子どもの気持ちを読み取り、母親が子どもの気持ちに焦点化した関わりをすることが、子どものより望ましい発達を導くとして重視されてきたが、本研究の結果より、母親の ER が高くても子どもの気持ちを不快感情として捉えやすい MM の特徴をもっていると、母親が元々持っていたと推測される積極的に人と関わる自信が子どもを対象とした対人関係において初めて直面する育児のむずかしさ、困難さを感じることとなり、育児場面において「子どもと積極的に関わる自信」が低くなる可能性が考えられる。そこで、子育てに対する臨床心理学的支援としては、母親が感じている困難感を受容していきながら、より試行錯誤的な関わりが求められる不快感情への関わり方について具体的な助言を行うことで、子どもに関わる自信に繋がると考えられる。

引用・参考文献

- 荒牧美佐子・無藤隆 (2008) 育児への負担感・不安感・否定感とその関連要因の違い—未就学児をもつ母親を対象に— 発達心理学研究 第19巻, 第2号 87-97
- 上嶋菜摘 (2010) 乳児に対する“かかわり”における母親の主観性—乳児の発達的变化と母親の主観性の質的变化に着目して—Human Developmental Reserch Vol. 24, 13-24
- 上嶋菜摘・小原倫子 (2010) 母親が乳児に対する“かかわり”において着目できる手がかり 乳幼児医学・心理学研究19(1) 49-60
- 遠藤利彦・佐久間路子・徳田治子・野田淳子 (2011) 乳幼児のこころ —子育て・子育ての発達心理学— 有斐閣アルマ
- 小野寺敦子 (2008) ego-resilience が母親の養育態度に与える影響 目白大学 心理学研究 第4号 25-34
- 小野寺敦子 (2009) 親子関係が青年の無気力感に与える影響—エゴ・レジリエンスが果たす機能— 目白大学 心理学研究 第5号 9-21
- 小原倫子 (2005) 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連 発達心理学研究 第16巻, 第1号 92-102
- 金城志麻 (2012) 幼児期の子どもを育てる母親の情緒応答性と育児効力感との関連 琉球大学教育学部紀要 第81巻
- 桑名佳代子・細川徹 (2007) 1歳6か月児をもつ親の育児ストレス (1) —母親の育児ストレスと関連要因— 東北大学大学院教育学研究科研究年報 第56報・第1号
- 鯨岡峻 (1986) 母子関係の間主観性の問題 心理学評論 29, 506-529
- 小林真 (2004) インターネットの利用が母親の育児ストレスに及ぼす緩和効果 富山大学教育学部紀要 第58巻 85-92
- 篠原郁子 (2006) 乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発 —母子相互作用との関連を含めて— 心理学研究 第77巻, 第3号 244-252
- 篠原郁子 (2009) 母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達的变化について 京都大学発達研究 Vol. 23 73-84
- 篠原郁子 (2011) 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達：生後5年間の縦断調査 発達心理学研究 第22巻, 第3号 240-250
- 島義弘・上嶋菜摘・小林邦江・小原倫子 (2012) 母子相互作用において母親が使用する情報：内的作業モデルの影響 発達心理学研究 第23巻, 第1号 36-43
- 田坂一子 (2003) 育児自己効力感 (parenting self-efficacy) 尺度の作成 甲南女子大学大学院論集創刊号 人間科学研究編 1-10
- 恒次欽也・庄司順一・川井尚 (2000) いわゆる育児不安に関する調査研究 (2) —最新版質問紙による「育児困難感」の規定要因に関する研究— 愛知教育大学研究報告 (教育科学編) 49, 125-132
- 中尾達馬・加藤和生 (2005) CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale) 作成の試み パーソナリティ研究 第13巻, 第2号 272-274
- 中谷奈美子・中谷素之 (2006) 母親の虐待的認知が虐待行為に及ぼす影響 発達心理学研究 第17巻, 第2号 148-158
- 中西美紀・岩堂美智子 (2004) 幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感 —内的ワーキングモデル尺度を用いて— 生活科学研究誌 (人間福祉分野) Vol. 3 107-114
- 長屋佐和子 (2005) 乳幼児表情写真 (IFEEL Pictures) を用いた母親の情緒応答性の測定：子どもの性差・人数・年齢が与える影響 発達心理学研究 第16巻, 第2号 156-164
- 畑潮・小野寺敦子 (2009) エゴ・レジリエンスとタイプA行動パターンとの関係について 目白大学心理学研究 第5号 107-116
- Meins, E. (1997) Security of attachment and the social development of cognition. East Sussex : Psychology Press
- Letzring, T. D. Block J. & Funder. D. C. (2005) Ego-control and ego-resiliency : generalization of self-report scales based on personality descriptions from acquaintances, clinicians, and the self. Journal of Research in Personality, 39, 359-422

謝辞

本研究の実施にあたり、快くご協力頂きましたお母様方、研究の意図に賛同して頂き、場所を提供して頂きました子育て支援センターのスタッフの皆様深く感謝申し上げます。また、本論文作成に際して、調査の実施等で協力して頂きました琉球大学の金城友里奈さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。